

國學院大學學術情報リポジトリ

愛媛東中予方言のアクセントと共通語のアクセント：
日本語史再建のために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋山, 英治, Akiyama, Eiji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002463

『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント

—日本語史再建のために—

秋山 英治

日本語諸方言のアクセントにおいて、京都方言に関する研究が進んでいる。京都方言は、他地域と比べて平安時代末頃からの文献資料が豊富にあり、それらの資料や現代語による調査研究によって、歴史的変遷がかなり解明されている。しかし、室町時代以降の変遷については不明な点もあり、高知市方言や徳島市方言など周辺部方言の調査結果をもとに考察することが多い。

愛媛県のアクセントについては、全国的にみてひじょうに複雑な分布をしていることで、アクセント研究の初期段階から注目を集め、1980年代以降、調査研究が進んだ。しかし、その多くが南予地方に関するもので、東中予地方に関するものは少ない。中近世期の京都方言の特徴を残す地域として知られる東中予地方は、「中央式」とともに、比較的古い時代に分岐したと考えられる「讃岐式」が隣接する地域である。また、日本語諸方言アクセントの史的変遷を考察する上で重要な音調といわれる「下降式音調」が聴かれる地域でもあり、調査研究が俟たれる地域であるが、これまでまとまった調査研究は行われていない。

本論文『愛媛県東中予方言アクセントと共通語のアクセント—日本語史再建のために—』では、これまでまとまった調査研究のなかった当該地域のアクセントについて、松山市方言を中心に、網羅的に行った調査の結果を述べるとともに、これらの成果を踏まえて行った歴史的研究の成果を述べる。さらに、当該地域において、急速に共通語化が進行していることから、共通語自体にどのような変化が起きているのかを解明するために、変化が著しいといわれる外来語に注目し、共通語における外来語の動向について述べる。また、本論文では、資料編として、松山市方言、松山市興居島方言、旧、北条市方言、今治市方言、国道11号線沿線地域（東温市重信町～新居浜市方言）のデータを付している。

本論文の目次について、章・節（項以下は省略）を示すと、次の通りである。

はじめに

第1章 序論

第1節 方言区画と愛媛方言

第2節 愛媛方言のアクセント研究史

第2章 愛媛県東中予方言アクセントの記述的研究

第1節 松山市方言のアクセント体系と音調

第2節 松山市方言の体言のアクセント

第3節 松山市方言の用言のアクセント

第4節 松山市方言の<式>

第5節	松山市方言の外来語のアクセント
第6節	松山市方言の駅名のアクセント
第7節	松山市興居島方言のアクセント
第8節	旧、北条市方言のアクセント
第9節	今治市方言のアクセント
第10節	今治市方言の駅名のアクセント
第11節	四国中央市方言の駅名のアクセント
第3章	愛媛県東中予方言アクセントの歴史的研究
第1節	「中央式」アクセントと「讃岐式」アクセント —東中予地方における分布と変遷—
第2節	移住者のアクセント—「中央式」から「内輪式」へ—
第4章	共通語のアクセント
第1節	NHK編『日本語発音アクセント辞典』における外来語のアクセント
第2節	『明解日本語アクセント辞典』における外来語のアクセント
	資料編
	参考文献一覧
	初出一覧
	あとがき
	索引

以下、目次に沿って、本論文の概要を示す（資料編以下は省略する）。

【第1章 序章】

第1章では、愛媛県方言の区画に関する先行研究およびアクセントに関する先行研究を概観した。

第1節 方言区画と愛媛方言

愛媛方言の区画に関する先行研究として、藤原与一・東条操・平山輝男・武智正人・杉山正世ら5人の方言区画案をとりあげた。旧藩領地をもとにした区画案など研究者によって、区画案に違いがあるが、このうち平山輝男・武智正人・杉山正世の3人は、アクセントの特徴を重視した区画案を提示している。アクセント特徴を重視した区画案が提示されたのは、アクセントが語彙や文法など他の分野より体系的で、地域差を明示しやすいためである。また、愛媛県のアクセントが、全国的にみてひじょうに複雑であることから、看過できない特徴として認識されていたことがわかる。

第2節 愛媛方言のアクセント研究史

愛媛県方言のアクセントに関する先行研究において、愛媛県のアクセントがどのように記述されてきたのかをみたところ、アクセント研究の初期段階より松山市方言がとりあげられてい

ること、1970年代までの研究では、他の都道府県と比べて、アクセントの種類が多い地域として報告されていることが確認された。1980年代以降、とくに1990年代に入り、愛媛県のアクセントに関する調査研究が進展し、これまで未調査であった地点の報告や、すでに報告されている地点の詳細な報告がなされるようになる。これまで未調査であった地点の報告としては、伯方島などいわゆる「東京式アクセント」と「京阪式アクセント」の境界付近の島々や、周囲の島々とは異なる特異な音調・類別体系を有する魚島など瀬戸内海島嶼部に関する報告がある。すでに報告されている地点の詳細な報告としては、アクセント研究の初期段階よりとりあげられていた松山市方言に関する報告がある。松山市方言に関する報告では、新たな調査によって、従来の研究では報告されていなかった「下降式音調」など、日本語諸方言アクセントの歴史の変遷を考察する上で重要な特徴がみつかったことなどが報告されている。

【第2章 愛媛県東中予方言アクセントの記述的研究】

第2章では、愛媛県東中予方言アクセントの記述的研究として、松山市方言を中心に、松山市興居島方言、旧、北条市方言、今治市方言、四国中央市方言をとりあげ、各方言の特徴について述べる。

第1節 松山市方言のアクセント体系と音調

松山市方言のアクセントは、2つの<式>と<下げ核>が弁別的な特徴の体系を有している。

高く始まる系列の<式>については、「下降式音調」だけでなく、「高平調」も聴かれることから<平進式>である。愛媛県東中予地方において、高起系列の音調に「下降式音調」が聴かれるが、新居浜市以西では、「下降式音調」だけでなく、「高平調」も聴かれることから、これらの地域では<平進式>である。一方、新居浜市以東では、高起系列の音調に「下降式音調」しか聴かれないことから<下降式>である。

低く始まる系列の<式>については、いわゆる遅上がりの音調だけでなく、どこからとも決めたい形で上昇する音調や、語頭から高く始まる「高平調」や「中平調」などが聴かれることから、<低接上昇式>である。なお、<低接上昇式>は、愛媛県東中予地方一帯に連続してみられる。

第2節 松山市方言の体言のアクセント

松山市方言のアクセントを解明するために、10歳毎に7つの世代にわたって調査を行った。その結果をもとに、体言のアクセントの特徴をあげると、主に次の4点があげられる。

- ① 松山市方言の伝統的なアクセントは、2拍名詞の類別体系から「中央式」(1/2・3/4/5)である。
- ② 松山市方言では、世代が若くなるに従って共通語化が進行している。共通語化は、とくに拍数の短い語にはやく起きる傾向がある。
- ③ 2・3拍名詞については、共通語志向が強く、「疑似標準語化」やアクセント変化に反する変化(類別体系の分裂)が起きている。とくに共通語化がもっとも進行している2拍名詞では、若年層で共通語化が完了している。
- ④ 2拍名詞において、若年層で起きている共通語化は、アクセント変化に反する変化で、

他の地域にはみられない松山市方言独自の変化である。この変化について、読ませる調査だけでなく、聴かせる調査を行ったところ、真田信治（1996）『地域語の生態シリーズ関西編』（おうふう）のいう「標準語を志向する過程で産まれる新用法、あるいは標準語への修正過程で産まれる過剰修正形式。話者があくまで標準語と意識している」変化、つまり「疑似標準語」であることが明らかになった。

第3節 松山市方言の用言のアクセント

松山市方言の用言のアクセントの特徴についてあげると、主に次の2点があげられる。

- ① 動詞については、近世以降、京都方言など京阪系諸方言で起きた（現在起きている）動詞の類推変化が、松山市方言でも同様に起きているものの、決して完了することはない、わずか1世代半で、共通語化にとってかわられる。
- ② 形容詞については、もともと松山市方言において、2・3拍形容詞ともにH1型（1型）に統合していたが、共通語化の影響を受け、3拍形容詞に新たに2型がみられるようになる。2型は世代が若くなるに従って多くみられるようになる。

第4節 松山市方言の<式>

松山市方言では、1950年頃生まれの話者を境に共通語化が起き始め、<式>の対立が曖昧になり、若年層では<式>が消失している。これらの<式>の消失がどのように起きているのか、その変化の過程を考察したところ、有標の<低接上昇式>が無標の<平進式>に合流する形で<式>が消失することが確認された。

第5節 松山市方言の外来語のアクセント

松山市方言の外来語のアクセントについて調査した結果、基本アクセント型・<下げ核>の位置・個々の語の揺れなど大部分において、共通語・京都方言と同じであることが確認された。外来語が日本語のなかに新しく入ってきた語であるために、方言差が激しい和語と異なり、全国的に同じような傾向を示す可能性を示唆している。

世代別にみた特徴としては、型の割合、個々の語の変化において、世代が若くなるに従って平板化が起きている。

第6節 松山市方言の駅名のアクセント

松山市方言の駅名のアクセントについて、3回にわたる調査を行ったところ、主に次の2点が明らかになった。

- ① <式>を有する話者においては、基本的に「式保存規則」が守られるものの、一部で「式保存規則」に反する場合がある。
- ② <式>の有無や話者の年代に関係なく、型の揺れがみられる駅名がある。また、2拍名詞において共通語化が完了した若い世代の話者においても、伝統的な型となる駅名がある。このことから、駅名（地名）など特定の条件下では、話者の年代に関係なく、伝統的な特徴が保持されていることが考えられる。

第7節 松山市興居島方言のアクセント

松山市興居島方言について、高年層・壮年層・若年層の3世代を対象に調査した結果、主に次の4点が明らかになった。

- ① 松山市興居島方言の2拍名詞の類別体系は、松山市方言と同じく「中央式」(1/2・3/4/5)である。
- ② 名詞において、若年層でわずかに共通語化が確認されるものの、松山市方言と比べると共通語化は進行していない。
- ③ 高年層・壮年層の2世代に、単語単独のみではあるものの、2拍名詞第5類語の拍内下降が残存している。愛媛県東中予地方において、2拍名詞第5類に拍内下降が残存しているのは、松山市興居島方言だけである。
- ④ 松山市から2kmしか離れていない、松山市のベッドタウンの興居島では、島という環境により、松山市方言よりも古形を多く保持している。

第8節 旧、北条市方言のアクセント

旧、北条市方言について、高年層を対象に、旧市内6地点で調査をした結果、主に次の3点が明らかになった。

- ① 旧、北条市内において6地点すべてで音調型・類別体系等が同じで、地域差はない。2拍名詞の類別体系は、松山市方言と同じく「中央式」(1/2・3/4/5)である。
- ② 旧、北条市方言では、松山市方言でほとんど聴かれなくなっている3拍名詞のH2型が残存している。
- ③ 松山市興居島方言と内実は異なるものの、旧、北条市方言は、松山市方言より古形を多く保持している。

第9節 今治市方言のアクセント

今治市方言について、高年層を対象に調査した結果、主に次の4点が明らかになった。

- ① 今治市方言の2拍名詞の類別体系は、松山市方言と同じ「中央式」(1/2・3/4/5)である。
- ② 今治市方言においても、東中予方言に聴かれる「下降式音調」が聴かれる。この結果から、香川県西部から愛媛県東中予地方一帯にかけて連続的に「下降式音調」が分布していることが確認される。
- ③ 今治市方言の「下降式音調」は、松山市方言より下降の幅が大きく、出現する頻度も高い。
- ④ 旧、北条市方言と同様に、松山市方言ではほとんど聴かれなくなっている3拍名詞のH2型が残存している。

第10節 今治市方言の駅名のアクセント

今治市方言について、高年層を対象に、駅名アクセントについて調査した結果、今治市方言では、松山市方言よりも「式保存規則」をよく守っていることが確認された。今治市方言では、

松山市方言でほとんど聴かれなくなっている3拍名詞のH2型を残存していることも併せて考えると、松山市方言より古形を多く保持している。

第11節 四国中央市方言の駅名のアクセント

四国中央市方言において、壮年層・若年層を対象に類別語彙および駅名に関して調査した結果、主に次の3点が明らかになった。

- ① 四国中央市方言の2拍名詞の類別体系は、「讃岐式」(1・3/2/4/5)である。高起系列の音調は、「下降式音調」のみが聴かれることから<下降式>である。一方、低起系列の音調は、いわゆる遅上がりの音調だけでなく、どこからとも決めがたい形で上昇する音調や、語頭から高く始まる「高平調」などが聴かれることから、<低接上昇式>である。
- ② 名詞において、若年層でわずかに共通語化が確認されるものの、松山市方言よりも共通語化の進行は認められない。
- ③ 壮年層・若年層ともに、比較的「式保村規則」をよく守っている。

【第3章 愛媛県東中予方言アクセントの歴史的研究】

第3章では、第2章の成果を踏まえ、愛媛県東中予方言アクセントにおける歴史的研究の成果を述べる。

第1節 「中央式」アクセントと「讃岐式」アクセント—東中予地方における分布と変遷—

愛媛県東中予地方にみられる「中央式」「讃岐式」の分布状況について、名詞だけでなく、動詞の活用形のアクセントに注目して調査分析した結果、主に次の3点が明らかになった。

- ① 「中央式」と「讃岐式」の境界は、従来先行研究で指摘されていた新居浜市東川よりやや東にずれ、新居浜市角野新田あたりとなる。この境界は、類別体系だけでなく、<式>の境界ともなる。すなわち、新居浜市角野新田以西は、<平進式/低接上昇式>で、以東は<下降式/低接上昇式>である。
- ② 動詞の活用形に注目すると、近世以降、京都方言など京阪系諸方言で起きた(起きている)動詞の類推変化の過程を示すように、漸層的な分布状況を呈している。この分布状況から、従来想定されていた動詞の類推変化の過程を、さらにもう一段階細かい「田辺段階」ともいべき段階を想定する必要がある。この結果は、愛媛県東中予方言に注目することで、中近世期以降の京都方言の歴史の変遷を詳細に解明することができることを示唆している。
- ③ 動詞の活用形の分布状況についてみると、東予地方では中予地方に先んじて動詞の類推変化が起きていることから、「中央式」と「讃岐式」の境界付近では、かつて「中央式」であったのが、ここ100年程度の間で「讃岐式」へ変化した可能性が考えられる。

第2節 移住者のアクセント—「中央式」から「内輪式」へ—

類別体系として孤立的な「内輪式」(1拍名詞/2・3、2拍名詞1/2・3/4・5)の愛媛県喜多郡長浜町(現、大洲市)青島方言について、音調型など体系の周辺部分に近畿方言に共通する特徴がみられること、また本島が播州坂越からの移住によって成立したという史実をもとに、現在

の坂越方言と祖形を同じくする「中央式」（近世初期頃の京都方言）の体系から、島という隔離された環境の中で、自律的に「内輪式」に変化したという仮説をたて、その検証を行った。〈式〉の変化については、音調の諸特徴から、無標の高起系列の〈式〉が、有標の低起系列の〈式〉に合流したという不自然な変化が起きていることから、仮説を一部修正する必要があるものの、類別体系（1～3拍名詞）については、仮説の通り、島ゆえに自律的に変化した、つまり「中央式」から「内輪式」への変化が自律的に起こり得ることを証明した。

【第4章 共通語のアクセント】

第4章では、共通語にどのような変化が起きているのかを明らかにするために、変化が著しいといわれる外来語に注目し、NHK編『日本語発音アクセント辞典』および『明解日本語アクセント辞典』の2種のアクセント辞典をとりあげ、その動向を述べる。

第1節 NHK編『日本語発音アクセント辞典』における外来語のアクセント

NHK編『日本語発音アクセント辞典』について、第2版（1951年）から第5版（1998年）までの各辞典において記載されている外来語のアクセントを調査した結果、先行研究で指摘されているように、個々の語の変化として、平板化（無核型化）、1型化（頭高型化）、一語化の3つの変化が起きていることが確認された。さらに、新たに以下の3点が明らかになった。

- ① 拍数別におけるアクセント型の変化は、約50年間でほとんど変化していない。
- ② 個々の語にみられる変化の進み方は、改訂される版や拍数によって大きく異なっており、その変化は一様ではない。
- ③ 個々の語の変化として、一度新しい型への変化をみせていながら、再びもとの型に戻ろうとする回帰の現象がみられる。

第2節 『明解日本語アクセント辞典』における外来語のアクセント

金田一春彦監修・秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』について、初版（1958年）から第3版（2001年）および『明解国語辞典』（1943年）において記載されている外来語のアクセントを調査し、その結果とNHK編『日本語発音アクセント辞典』（第2版から第5版）の結果を比較分析したところ、主に次の5点が明らかになった。

- ① 拍数別におけるアクセント型の割合の変化は、若干の違いはあるものの、NHK編『日本語発音アクセント辞典』（第2版から第5版）とほぼ同じ割合である。
- ② 金田一春彦監修・秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』は、NHK編『日本語発音アクセント辞典』よりも保守的なアクセント型を重視する傾向がある。
- ③ 個々の語にみられる変化の進み方は、具体的な点において違いがあるものの、NHK編『日本語発音アクセント辞典』と同様に、一様ではない。
- ④ 個々の語の変化としては、NHK編『日本語発音アクセント辞典』と同様に、平板化（無核型化）、1型化（頭高型化）、一語化の3つの変化が起きている。
- ⑤ 一部異なるところがあるものの、平板化（無核型化）、1型化（頭高型化）について大部分がNHK編『日本語発音アクセント辞典』と同様の特徴がみられる。

以上、本論文は、アクセント研究の初期段階から注目されつつも、これまでまとまった調査研究が行われず、詳細が不明であった愛媛県東中予方言アクセントの全貌の解明、また当該地域に大きな影響を与える共通語の実態の解明を目指して取り組んだものである。本論文によって得られた研究成果は、近畿・四国地方に分布する京阪系諸方言アクセントの史的変遷の考察、さらには愛媛県から広島県の島嶼部に分布する「東京式アクセント」と「京阪式アクセント」の成立過程の検証（いわゆる「京阪式アクセント」から「東京式アクセント」が成立したという仮説の検証）において、有益な情報を供するものである。いまだ研究の途上にある日本語諸方言アクセントの史的変遷の解明に対して、大いに貢献するものであろう。